

4 私の「津軽」

作者：金沢市在住 50 代男性公務員

作品の概要	<p>作者は、転勤に伴い青森で生活した経験を持つ。作品は、作者が訪れ、印象に残った地の光景や解説を中心に書かれ、紀行文とは異質な内容になっているが、各地の自然や動植物の描写、人の観察などが非常に詳しく、ルポのような作品。各地の写真が豊富で印象的。</p> <p>旅人の気持ちをくすぐるものとして、青森市内の「下北半島→」「←津軽半島」が上下に並んだ案内標識を紹介、最果てへの旅情が掻き立てられ、作者は赴任最初の土曜日に尻屋崎、日曜日に龍飛崎を訪れ、太宰が描いた龍飛の光景に触れ感激する。</p> <p>津軽半島の漁り火は、竜泊ラインの眺瞰台からの日本海、龍飛崎、三厩、今別と津軽海峡と異なる光景が楽しめ、夏の風物詩であり、海と空の一大スペクタクルを構成する重要な要素となっている。</p> <p>妻と二人で訪れたコウナゴを茹でる作業小屋、フキを茹でる作業場では、社交的な津軽の女性と木訥で不器用な津軽男子の優しい心根に触れる。</p> <p>青森の冬を代表するハクチョウを追い、青森市後潟の田んぼへ。平館の松並木、高野崎、鑄釜崎、龍飛崎と外ヶ浜を北上、海岸付近の古木、植物などを紹介しながら、作者独自の視点からの情景描写が続く。</p> <p>続いて日本海側に移り、相内の虫送りに遭遇、村を挙げての心のこもった行事に感動。</p> <p>最後の舞台は氷雪の十三湖、冬の十三湖こそ太宰の描いた光景だと感じるが、赴任最後の冬に太宰の視点に近い展望台を発見、夏への思いを残しながら津軽を離れ、津軽への「あどはだり」の想いで結ぶ。</p>
選考理由	<p>津軽半島地誌の優れたルポである。</p> <p>太宰の『津軽』を追いながら、知られざる風景を紹介、写真もすばらしい。</p> <p>その土地で働く人々への暖かいまなざしが旅へといざなう。</p> <p>あまり知られていないスポットやその周辺にも光を当て、その魅力をよく伝えている。</p> <p>ありきたりの観光ではなく、一步踏み込んだその土地の描写となっており、津軽の魅力を素敵に表現している。</p>